

スタンダール全集

7

アンリ・ブリュテールの生涯

桑原武夫 生島遼一 編集

# スタンダード全集

7

## アンリ・ブリュールズの生涯

人文書院

Oeuvres  
complètes  
de  
Stendhal

Tome 7

Vie de Henry Brulard

1968年9月30日発行

編集者——桑原武夫 生島遼一

発行者——渡辺睦久

発行所——人文書院

京都市中央局内仏光寺通高倉西 TEL代表 (075) 351-3343

印刷——内外印刷株式会社

製本——坂井製本所

## 情熱の文人画——桑原武夫

今日、近代文学を語ってスタンダールを無視することはできない。また、無視する人もはやない。しかし、スタンダールの諸作品のなかで、どれにいちばん魅力を感じるかは、読者によってさまざまに異なる。そしてその異なりかたが、読者の思想ないし趣味をしめす。

彼の小説作品よりも自伝的作品、とくに『アンリ・ブリュールの生涯』を選ぶのは、ヴァレリー・ジッドなどである。彼らは小説愛好者ではない。一作者の仮構にすぎぬものによって感動させられることを恥じ、生きたシステムを直接見たいと思うのである。しかし、アランの弟子としての私は、やはり『赤と黒』や『パルムの僧院』のほうを選択する。といっても、この『アンリ・ブリュールの生涯』に魅力を感じないわけでは、もちろんない。大好きなのだ。それではどこが面白いのか。

永遠に、といえはスタンダールの好みでないかもしれないが、いつまでも、みずみずしさを失わぬ大小説を書いたアンリ・ペールとは、どんな男であったのか。それを知ること、純文学的興味ではないかもしれないが、切実な興味であるにちがいない。それは芸能人の私生活をのぞく週刊誌への興味とかならずしも異質なものとえぬかもしれない。それを無理に否定するにもあたるまい。スタンダールの芸術には、ときとして卑俗と見せつつ清新な味わいを出すところがあるが、『アンリ・ブリュールの生涯』は、その極限化といえる。

アンリ・ペールは、幼いときも老年になっても、いつもほうれん草とサン・シモンの覚書の文体が

好きだったこと、叔父のまねをして、女たらしになってやろうと決意を固めていたが、本気に惚れすぎて成功しなかったこと、靈感に打たれるとつぜん倒れることがあったこと、これらの事実は厳粛でも深刻でもない。むしろいささかほほえましい、滑稽ですらある印象をあたえないだろうか。ヴァレリーのような意地のわるい人間は、そこに後世に生きのこるための演技を認めている。演技と見るか、ありのままに書くほうが楽しいとする自己愛の試みか、それをきめるのは読む人の好みというほかはない。少年のころ、木の幹や欄干に、好きな人の名を彫りこんだおぼえのある人と、ない人とは、判断がわかれるだろう。ズボンのバンドの内側に、略語で「私は五十代になろうとしている」などと書きこむのは、たしかに高雅な趣味ではない。しかし、かならずしも茶番とはいえない。私などはたいへん面白い。

小説の読みかたにはいろいろあるが、いつのまにか主人公と同一化して、喜怒哀楽をとにもするというのが、幼稚のようにみえてもとても正統的な読みかたである。主人公の言動のうちに、それをあやつる作者の技巧のみを読みとることは、人物を人形と同一視することになる。そうでもしなければ読みつづけられない作品もありはするが、ジュリアンといっしょなら、ピストルを手に恋人の寝室の窓まで梯子をよじようという気分になるほうが自然であろう。そうした共感に値するだけの生命力をもって、スタンダールの作中人物は創造されている。そうした同一化の没入感をもって彼の小説を読んだ経験のある読者には、『アンリ・ブリュタールの生涯』は、さらに深みをくわえて面白い。

馬のことを気どって「駿馬」などといってみたところで、なにになる。それこそ許しがたい悪趣味だ、いや、偽善である、とさえべールは言うのだが、それと同じ言葉は『パルムの僧院』に出てくる。少年アンリが、「自分に関心のあることを家の者に話したりするほど、おれはばかなのか」と自責する場面があるが、レナール家に住みこんだジュリアンもまったく同じ発想をする。そして、この少年教師と同じように、アンリは聖書を暗記していたのだった。読者の楽しみのために、これ以上の指摘

はひかえるが、読者は『アンリ・ブリュールの生涯』のなかで、ジュリアン、ファブリス、リュシアンに幾度もぶつかり、ハツとするにちがいない。小説のモデルせんさくは悪趣味とされる。しかし、研究とはもともと悪趣味なことであって、スタンダールのパーソナリティについての最上の参考書は、いつまでもこの『アンリ・ブリュールの生涯』であることは変わらないのである。

地方都市の最上流ブルジョア家庭のひとり息子、生まれつき敏感で、知能がすぐれ、家では「神童」ときめこまれてゐる。万事格式を重んずる家庭で、近所の餓鬼どもとは遊ぶことも許されない。母を幼くして失い、父と叔母とイエズス会士の家庭教師の三頭庄制政治の犠牲になったと思ひこんでゐる。家族の貴族趣味に反発し、平民をなにより愛するが、しかもアーリー・ラーニングの影響はあくまで強く、平民のそばへゆくと、その俗悪さにたえられない。連中といつしよに暮らすくらいなら、月の半分の牢獄ですごしたほうがましだとさえ言う。故郷グルノーブルがなにより嫌いで、一日も早くそこから脱出したい。その脱出の手段として、パリの理工科学校に入学するために、数学の勉強にうちこむが、さてバリへ来てみると、その日からいやになる。山がどこにも見えないから、というのがその理由だ。

あいまいさを終生の敵とし、明晰な論理によってつねに偽善を排除しなければ承知できない。中央学校でならった科学精神をあくまで生かそうとするのだが、一方、ペールの心は、その皮膚と同じように、若い女のように過敏で、その矛盾のため、一生不幸な恋人の状態を脱しえなかったことは、この本の第一章にぐわしい。彼の頭脳はすみやかに回転するが、その弁舌はけっしてさわやかではない。そして、いつも夢想と現実の乖離があった。つまり、素朴な公式によれば、作家になる素質は備わっていたといえる。

整理してしまえば、魅力はなくなるが、本文を読めば、次から次へとひっきりなしに事実が提出され、そのあいだに感想がたたみこまれるところに魅力がある。文章などかまわずに、急いで書きとめ

なければ、いま思い出したことがすぐ逃げ去ってしまうかのようだ。『アンリ・ブリュールの生涯』の原稿の書体は、難読をもって知られるスタンダールの筆跡のうちでも、もっとも難読とされているが、そこからスピード感のある自由型の文体が生まれている。

スタンダールは、なぜこの自伝を書いたのか。

彼はチヴィターヴェッキアで死ぬほど退屈していた。それに紙をインクでよごすことは、一生を通じて彼の最大の楽しみであった、と告白している。『アンリ・ブリュールの生涯』は、まず時間つぶしとしてはじめられた。そして、書いてゆくにつれて、楽しみは増大し、パリから賜暇をあたえる旨の通知があつて、にわかに中断するまで、およそ四カ月夢中の走書きがつづけられたのである。

時間つぶしとしても、なぜ小説でなく、自伝でなければならないのか。彼は第一章に書いている。

「夕方、大使の夜会からひどく退屈して帰ってきて、つぶやいた——自分の生涯を書いてみなければなるまい。二、三年かかってそれが書けたとき、おそらくや々と私にわかるだろう、私が何であつたか、陽気か陰気か、機知の人か馬鹿か、勇気のある人間か臆病者か、そして要するに全体として幸福か不幸か」。

そして第二十二章では、「これがあの偉大な言葉『なんじ自身を知れ』にたいする回答である」と言っている。五十三歳のスタンダール、すでに『赤と黒』と『リュシアン・ルーヴェン』を書きおえ、また、間もなく『パルムの僧院』をまたたくうちに完成しようとする大作家、しかし当時はまったく無名の外務省の役人が、数年後にむかえる死を前にして、おのれの一生は何であつたかを知らうとするのである。

デルボイの神託「なんじ自身を知れ」をソクラテスは、われわれの根本的な無知から出発し、愛知によって精神をできるだけすぐれたものにする、すなわち徳を完成すること、という教えとする

が（田中美知太郎『ソクラテス』第九章）、この年老いたエビキュリアンに有徳な生活への志向があったであろうか。彼は『アンリ・ブリュエールの生涯』を中絶してパリへ帰ると、十年前にそむき去った伯爵夫人クレマンチヌにすぐ言いようとするのである。もっとも道徳ということ禁欲主義的にのみうけとっては、アポロンの神意にそむくかもしれない。

そもそも人間が自伝を書くということは、自己主張が自己愛惜か自己教育か、この三つの要素のいずれかを意図としてもつはずである。近代自叙伝の元祖となったルソーの『告白』は、愛惜の情を深くふくむけれども、表面は自己主張であって、自己の特異性の誇示が眼目となっている。ルソーをつねに尊敬したが、その誇張癖はしんぼうがならぬとしたスタンダールには、自己の特異性の主張は強くは見られない。また自己教育をあまり道徳的な意味にとることは、スタンダールの場合、不自然となるであろう。「じっさい私はほんのすこしでも自分の生活を方向づけようとしたことがあったろうか」（第一章）と言っているのだから。そこで、人生の目的は幸福の追求にありとするベイルスムの観点にしばってみるならば、自分はどのようなパーソナリティであったかを正確につかむことは、幸福符において、獲物の研究と同時に獵人の主体を確認しておかねば、成果はあがらぬというのと同じことになる。それは「なんじ自身を知れ」への回答ともなるが、あまりに実用主義的な答となるであろう。

『アンリ・ブリュエールの生涯』は、分類してみれば、主として自己愛惜に属するが、「社会は、目に見える奉仕にたいして報いる」というエルヴェシウスの法則を確認した人間の甘えのない愛惜である。自分はこのような環境で、このような教育をうけ、このような対人関係のなかで、このように幸福を追求してきた。それを幼時から竜騎兵として憧れのミラノへ入城するまで、できるだけ率直に誠実に描くことによって自分自身を知ることができるだろう。自分が勇敢であったか、臆病であったか、幸福であったか、不幸であったか、等々にも答が出るだろう。しかし、ほんとうは、明確な答な

どありえぬことを、彼はおそらくあらかじめ知っていたのであろう。

スタンダールはあくまで誇張を避け、嘘を書くまいとする。しかし、彼のもとめたのはいわゆる歴史事実ではない。他人の知識のために正確な科学的記述を目ざしたのではない。ただ、自分の楽しみのために、過去の各瞬間に自分ほどのようなものであったかを知ろうとするだけである。そこで、彼の率直な告白がある。

「私は事物を、あえてそのもの自体としてではなく、ただそれらが私にあたえる効果のみを描こうとしているのだ」(第十四章)。そのようにして綴りあわされた過去の自己の姿は、いずれもそのときの状況に応じてひたすら幸福を追求している。しかもその幸福追求のしかたは、十歳のときも五十三歳のいまも、ちっとも変わっていないではないか。その確認は、スタンダールにひそやかな喜びをあたえているようである。自分は自分であったのだ。あれ以外に道はなかったのだ。そう考えることは弱々しい諦念でもなく、強がった宿命愛でもない。もっと楽しみの感情がはいっている。自分は醜男であった。しかし、それを嘆いてなにになろう。それより、一つの事実を思い出すほうがよいのではないか。そして彼は少年のころに憧れたヴィクトリーヌの言葉を余白に書きこむ——「あの人は美男子ではないけれど、その醜さをあの人に責める者はないでしょう……私のころの若い人たちのなかで、あの人はいちばん才気があり、愛想のよい人でした」。

ローマ、ジャンニコ丘の壮大な眺望を序幕とし、「人間に許された幸福の頂点」にあったミラノ入城の場面にいたって、「まったく私はつづけられない。題材が語る者の力を超えているのだ」といって擱筆するのは、あざやかに首尾相応じて、技巧的な印象をすらあたえるが、その中間はけっしてよい構成をもつ書きものではない。ただ、末尾にいたって、憧れのイタリアの土地をふんで狂喜する自己を意識しながら、「読者はいま一八〇〇年の一狂人の社会への門出のことを読んでいるのか、あるいは五十三歳の男の冷静な回想を読んでいるのか、わかるだろうか」と記している。読者をばかにし

た表現のように読まれるかもしれないが、アンリ・ベールは、真剣に、しかし笑みをうかべて自問しているのだ。私たちはそれに答える。わかるものか、そしてそれでいいではないか、と。

この三百ページの手記は、もちろん心の底で後世に、一九三六年に期待しているが、しかし、読者確保のために筆を曲げたところはすこしもない。あくまで自分の楽しみに書くのだ。そしてたまたまそれをよしとしてくれる読者がみつければよいが、みつからなければ、それもよい。自分はこれを書くことによって自分を知ることができる。いや、知ってどうしようというのだ。知的理解が主目的ではない。知ろうとする過程において、過去の情景がまざまざと目の前にうかぶ。それをペンで描写することはとうていできないし、またそれは必要でもない。その情景において自分のもった感情ないし感動、それを書きとどめるだけだ。書きすすめつつ、ふりかえると、アンリの一生は幸福とはいえないが、けっして不幸ではなかった。それでよろしいではないか。達観ともいえないが、あせりが無い。絵でいえば、文人画に近い趣が、そこにあることを私は感じる。世捨人的という意味では毛頭ない。ただ、専門家的ないしは職業人的な、顧客を意識しての制作からはまったく遠い。技術を無視するのではなく、それはみがくのだが、あくまで素人の自由精神でいきたいという趣がある。スタンダーの芸術全体がそうした精神に貫かれていて、それがかえって今日無上の魅力となっているのだが、『アンリ・ブリュールの生涯』はその事情を端的にしめすものではなからうか。

## 『アンリ・ブリュエールの生涯』について——生島遼一

### 1 自己を知れ (*Nosce te ipsum*)

スタンダールにとっては、若いときから、生涯最大の問題は自己を知ること、「自分とは何であるか」を確かめることであった。この問は彼の人間として、文士としての最大関心事であり、生涯つきまとった執念 (*obsession*) の一つきものであった。

ジョルジュ・ブラン (*Georges Blin*) がこの作家のバーソナリティを精密に研究しようと試みた大著 *Stendhal et les Problèmes de la Personnalité, I* (『スタンダールと人格の問題』I) の第一章が *Nosce Te Ipsum* (なんじ自身を知れ) と題されていることもしたが、って領けることだ。スタンダールの小説に登場する主人公たちがかならずこの「自分は何であるか」の問を自分自身に執拗にかけていることは、読者がよく知っている。小説以外の書きもののなかでもスタンダール自らこの問を提出する場合は、じつに目につきすぎるほど頻繁である。

一八二六年には『ローマ散策』のなかでつぎのように書いた。

「私とは、何だ？ 自分には何もわからない。私はある日この地上で目をさました。私は一つの肉体、一つの性格、一つの運勢にしばらくつけられている自己を発見する。私はこういうものを変化させることを望むことに興じ、そして一方生きること忘れようとするのか？」

日記のなかでも、

「私は自分自身をまだ見定めていないように思う。自分の性格がどうなるかが、私にはまだわからない……自己を自分で探求すること……」（一八〇六年三月十四日）。

「われわれの性格は、良きにしろ悪きにしろ、われわれが考えることをはじめるとき、つまり十六歳のときに自分で知る肉体のようなものだ。美しかれ、醜かれ、あるいは平凡でも、ありのままにとらねばならない。ただ賢明な人はそれをうまく利用する」（『文学論叢』）。

彼が自己を知るための最初の試みは、一八〇一年に記しはじめた「日記」を書くことであった。その日記のなかに、若いころ愛読したデステュット・ド・トラシの『論理学』を読んだときの感想が記されているが、その一節にこう言っている「私はトラシの意見に賛成だ——*Nosce te ipsum* なんじ自身を知れ、これが幸福の源泉である」。

スタンダールの読者にとっては不思議でもないことだが、自己を知ることとは、『赤と黒』の作者にとっては、つねに知識欲、好奇心、人間研究的探究の中心問題であり出発点であったが、そればかりでなく、このように幸福論ともしっかり結びついていたことに特色がある。

『赤と黒』発表後、まずトリエステ領事に任命されトリエステに到着したが政治的要注意人物としてアグレマンを拒否されたため、任地が変更され、急に法王領のチヴィターヴェッキアにフランス領事として赴任した事情はよく知られている。一八三一年から死ぬときまで、アンリ・ベール（スタンダール）はこの小漁港のような美しい町に原則として住んでいたわけだが、しばしば、ローマその他の地方に出かけたり、休暇をえてパリに帰つてもいる。しかし、任地であるチヴィターヴェッキアにいるあいだ、この辺地での単調な生活にはなだ退屈し、鬱屈した気持を当時の書簡のなかでさかんにうったえる。退屈をまぎらすもっともいい方法は、ものを書く、ことだった。彼は終生書いていた

人物だが、このチヴィターヴェッキアでもじつによく書いた。イタリアの古記録に取材した『イタリア年代記』の諸篇、『社会的地位』とか『リュシアン・ルーヴェン』のような未完小説。そして『エゴチスムの回想』『アンリ・ブリュラールの生涯』のような純粹に自伝といひうる回想の作品である。生活記録の時間的順序からいうと逆になるが、まずとりかかったのは『エゴチスムの回想』(Source-nir d'Egotisme) だった。

一八三二年六月おわりごろにこの回想記を書きはじめる。これは王政復古期のパリの滞在期間中心の自己の生活を思い出しながら書いたものだが、スタンダールの自己を深く掘りさげて探求より、当時の彼の周囲にいた知人、友人の肖像、マレスト、パロー、ラファイエットたちとの交遊やパリの社交界を描写している。そして、この書きものはすぐ中断されてしまった。しかし、この回想を書きながらも、筆者の問題はしじゅう「自己を確かめること」に何度も方向づけられて行くこと、これは注目しなければならぬ。第一章で「私は自分自身を知らない。ときどき、夜そのことを思うと、かなしくなる」と言ったり、また第六章では「人はすべてを知ることができる、自分自身を除いて」というような感慨がもたらされている。けっきょく、この最初の自伝著作の試みは長つづきせず筆をおいてしまう。そして、長篇小説『リュシアン・ルーヴェン』の執筆にとりかかってしまった。『リュシアン・ルーヴェン』も、しかし、未完成におわるのである。この長篇小説はスタンダール小説のなかでもっとも、作者の自己と親密な関係をもつ作品であることはよく批評家が指摘する。私もそのように考えている。主人公リュシアンは「自分は何か?」の問をほとんどしじゅう自分自身に問いかける典型的な人物である。スタンダールはこれで時代記録的な小説を書く意図をもっていたらしいが、『リュシアン・ルーヴェン』はけっきょくは、スタンダールの自己にもっとも密接した作品、ジャン・プレヴォーにいわせると作者の「日記」のごとき意味をもつ作品になってしまった。ことに、この未完成作品には、よく知られているように、豊富な原稿ノートがのこされている。このノート(マルジナリ

ア」と本文とを照合しながら読むと、スタンダールがこの小説を書きながら、たえず自己と問答しながら書きつづけていたことが明らかに。主人公リュシアンにかんして、スタンダールははっきりとノートの中で、「主人公は Dominique 自身だ」と記している。Dominique はスタンダールが自分を親しき名をもって呼ぶときの名のひとつである。

自伝『アンリ・ブリュタールの生涯』はちょうどこのような特色をもつ小説をほぼ完了したときに執筆開始されたものだ。若いときから自己の存在の探求、自分を知ることが、人生の最重要な問題だったスタンダールが五十の年齢に達して、いよいよ決定的に自己とは何かを、あらゆる書きものを通じてつきとめたい欲求を最高度に高めたときに、書きはじめられた作品なのである。

「私は何であつたか？」こういう反省の言葉が第一章からとび出すことで、意図ははっきりしているが、第二十二章のなかに書かれたつぎの一句は、じつに明瞭に『アンリ・ブリュタールの生涯』執筆の動機や態度をわれわれに告示しているといつていい。

「私には歴史(Histoire)を書くなどという大それた考えは毛頭ない。ただ単純に私の思い出を書きつづけて、私がいかなる人間であつたかを洞察しようとするだけだ——馬鹿か才人か、臆病か勇敢か、等々。それがあの偉大な言葉『なんじ自身を知れ』(Gnois seauton)にたいする回答だ」。

## 2 執筆期間その他

ここで、もういちど、『アンリ・ブリュタールの生涯』執筆の経過をふりかえってみよう。すでに一八二二年ごろに自己の生涯の回顧からその要点を略記しようとした試みが、発見できる。しかしもっと重要な自伝作品を書こうと発想したのは七月革命直後（つまり作品史的には『赤と黒』発表直後

のこと)、トリエステ領事に任命されて任地に行く途中であった。一八三一年一月六日にこういうことを書いています。

「私はいままでに数々の偉大な人物の伝記を書いた。モーツァルト、ロッシニ、ミケランジェロ、レオナルド・ダ・ヴィンチ。この種の仕事は私をもっとも楽しませたものだ。私はもう資料を探したり、矛盾した証言を検討したりする根気がなくなった。自分がそのすべて諸事件をじつによく知っている一つの生涯を書いてみようという着想が私に生まれてきた。不幸にも、この個人は非常に未知のものなのである、それは私である。私は一七八三年一月二十三日、グルノーブルで生まれた……」。

こういう着想をいだいたその翌年、一八三二年に、さきに一言した『エゴチスムの回想』を書きはじめた。チヴィターヴェッキアでの孤独感になやみつ、一八二一年六月から一八三〇年十一月までの時期の回想がその内容になっているので、自伝の一部であるが、この『アンリ・ブリュタールの生涯』のように幼少年期からはじまる全生涯の展望を意図したものではなかった。そのような全般的自伝をこころみた証跡は一八三二年二月十五日の日付で自分の家族、自分の少年期にかんする思い出を若干記してこれに *Mémoire de Henri B...* と題している断片などによっても見られるが、これはすぐ中止した。

『アンリ・ブリュタールの生涯』の執筆着手は、すぐこのあとに説明するように一八三五年十一月というのが定説であるが、その半年以前の同年五月十四日、当時小説『リュシアン・ルーヴェン』を書いていたスタンダールは、この小説の原稿の余白につぎのように記している。

「もしこれが価値のないものだったら、一年間の仕事をむだにしたことになる。ドミニックの回想記を書いたほうがよかったのだ」。

この終始念頭にあって離れなかった回想記 (*Les mémoires de Dominique*) のことを、ルソー流に私の告白録 (*mes Confessions*) と呼んでいる場合もたびたびある。すでに『アンリ・ブリュタール

の生涯』を開始する直前の一八三五年十一月二十一日に出版者ルヴァヴァスールにあてた手紙のなかでも、自分の原稿をルソー流に告白録と称しているのが目につく。

「私はいま、非常な愚行になりかねない一つの本を書いているのです。これは、文体の点を別にすれば、ジャン・ジャック・ルソーのような、私の告白です。もっと卒直さをもったものです。私は一八二二年「……」のロシア戦役からはじめました。ロシア戦役と皇帝の宮廷のほかに、作者の恋愛も書かれている。これは美しい対照です」。

諸研究家の一致した意見として、この『アンリ・ブリュラルの生涯』の執筆時期は、一八三五年十一月二十三日から翌三六年三月十七日まで、ということになっている。ここで読者にとって問題になるのはこの書物巻頭の、つまり第一章のはじまりの一句だ、「私はけさ、一八三二年十月十六日、ローマ、ジャンニコロ丘の上、サン・ピエトロ・イン・モントリオにいた。すばらしい太陽だった……」。この書出しはまことに美しい。スタンダールが自分の好きなローマ近郊の眺望にうっとり見入っている姿が目にかぶ。秋の美しい陽ざしまで感じられる。しかし、この一八三二年十月十六日という日付に、研究家は疑問をいだく。いかにも、この日付の日の実感が、自伝としてほとんど同時に書かれているような印象を読者はうけるが、じっさいは、この文章にある一八三二年には、彼はローマにいなかったことが、アンリ・マルチノーその他の人によつてはつきりと実証されている。この日付の当時、スタンダールはアブルッチ山岳地方に旅行していたことが明らかにしている。

そして、彼自身、この著書の原稿の一部に『Book commencé le 23 novembre 1835』（一八三五年十一月二十三日に開始した本）と記しているからまぎれもない。本文テキスト第一章のすこしさきのところで、「私は、一八三五年十一月二十三日になって、やっとさきをつづける。私の生涯（my life）を書こうという同じ考えは最近、ラヴェンナ旅行のあいだに頭にうかんだ。じつをいうと、私

は一八三二年以来幾度もこの考えをいだいた……」というような記述があり、冒頭に記された日付にこの原稿を開始し、中断して、三年後に書きつづけたと思われるような書きぶりであるが、これも正確ではないようだ。原稿を実地に観察すると、はじめのほうと、これにつづく部分とで、インクの色、紙、その他まったく同一と認められているのだから。

要するに、くりかえすが、執筆時期は、本文記述と関係なく、一八三五年十一月二十三日から三六年三月十七日に擱筆するまで、約四カ月にわたって、普通は毎日十八ページから二十ページの速度、

«Ordinairement dix-huit ou vingt pages par jour, et les jours de courier, quatre ou cinq, ou pas du tout» というリズムで、ローマあるいはチヴェイターヴェッキアで書きつづけられたのであった。

くどい説明のようだが、書出しの日付「一八三二年」というのは、すこしさきに自分で書いている文章にあるように、いまや自分は「五十歳になろうとしている」という感想と結びついているのであろうと私は推察する。一七八三年生まれのスタンダルはちょうど一八三二年に正確に五十歳に達しようとしていたからである。もちろん、一八三二年にも、それ以前にも、このような全生涯の回想ものにしようという発想をたびたびいだいたことは、前に言ったとおりだ。

『アンリ・ブリュラーの生涯』の原稿は全部、グルノーブル市立図書館に保存されている。細かいことだが、全体は 30cm×30cm の大型用紙に書かれた八百七十八ページであって、本文のほかに多くの書入れや、デッサンがこれに付加されている。

### 3 近代文学的自伝、書く喜び

「私は暖炉に火を入れさせてこれを書いている。私の希望だが、すこしも嘘をまじえず、自分で幻